

<書評>

岡 裕人著  
『忘却に抵抗するドイツ——歴史教育から「記憶の文化」へ』

那 須 妙 子

本書の表紙・中表紙には、„Erinnerungskultur in Deutschland“ というドイツ語フレーズが付されている。これは、「ドイツにおける記憶の文化」という意味で、それが本書を貫く太い糸となっている。

本書の特徴と魅力は、著者自身が最後に書いていることに凝縮されている。

「私がドイツで20年以上に渡り、歴史学および歴史教育に携わってきた一つの証になることを願って書いた。とりわけ<ドイツの歴史教育>をできるだけ生の姿で伝えようと、現地の学校や研究機関、講演会や朗読会に出かけて取材し、各地、各所で対話した多くの人たちの声を届けようと工夫した。」(P.198)

巻末の詳細で長い文献リスト(ドイツの教科書、副教材および教育カリキュラム9種を含む)には、著者が歴史学者として客観的で学問的な資料を丹念に研究したことが反映されている。そのしっかりとした基礎を踏まえたうえで、生き証人の生の声、個々の事例を丹念にひろって歩いたのだ。

それは、歴史を学ぶ際、対象となる歴史上の出来事をできるだけ自分に引きつけて、自分の問題に置き換えてみると、その歴史上の出来事や人物に共感したり、批判したり、自分の価値判断に従って評価することができる(P.48)、という筆者の信念があるからだ。

アメリカでこの数年、自分史研究(Biographical Research)が盛んになってきていて、そのための学会(International Auto/Biography Association)が発足されたことが思い起こされる。叙述がいきいきとしているのは、著者自身が長年ドイツで生活し、子どもたちを現地ドイツの学校に通わせるなど、ドイツ社会に溶け込もうとしていたからだ。アウトサイダーにとどまらず、インサイダーとしてもドイツ社会を観察する、という独自の手法が可能になったわけでもある。

著者は自らの論述展開を、「<記憶>をキーワードに、ドイツやヨーロッパの歴史認識の本質とその変化を探り、日本歴史認識の在り方とも対比してみようとした」と説明している。読者を深い考察へと導くキーワードは「記憶」だけにとどまらず、他のユニークなキーワードも随所にちりばめられている。そうしたキーワードに沿って、本書を紹介していきたい。以下、キーワードを太字で強調したのは、評者の考えによるものである。

本書は、4章から構成されている。第1章「**記憶を伝える**」ではドイツの歴史教育の現状、第2章「**記憶は変わる**」ではドイツの記憶・歴史認識の変遷、第3章「**記憶と対話**」では、かつて敵対した国々と記憶を共有するための努力が述べられている。そして、第4章(「**記憶と未来**」)では、現在過渡期にあるドイツの、記憶を未来に伝えるための模索と挑戦の現状が報告され、これからの課題・展望

が示されている。

いくつかのキーワードを手がかりに、もう少し詳しく各章を概観してみよう。第1章ではまず、70-80年代に成立し、今では他国から模範とされるようになった、ドイツの歴史教育「過去の克服」（ナチスや戦争犯罪について批判的に見ること）の実例がギムナジウムの最高学年の歴史授業という形で紹介される。

一方、現代のドイツの若者には「ドイツの過去」だけでなく、その「過去」へのとりくみも歴史になってきたこと、自国の現代史重視のカリキュラムにあきたらず、グローバルな教育を求めていることも、実際のインタビューで確かめている。

また、この章ではホロコースト生存者のドキュメンタリー映画『ゲルダの沈黙』とその原作が紹介される。原作を書き、各地の学校で朗読してまわっているのは、東ドイツ出身のジャーナリスト、クヌート・エルスターマン氏である。この人のことばは、漠然とした情報として私たちが聞いていたことを確かなものにする。東ドイツには、「東の間人は、ファシズムの責任をとって、強制収容所を解放した」という建国神話があり、「私たちはこの神話を小さい頃から叩き込まれてきたのです。」(P.42)

エルスターマン氏は自分の活動を通して、政治的な思想からでなく、個人ができる小さな抵抗心からユダヤ人を助けた東独の人たちの「小さな個人の大きな勇氣」を知るようになったという。

第1章は、「市民に伝える記憶」でしめくられる。学校だけではなく、市民の間でも、ユダヤ人迫害の記念日に生き証人の体験談を聞くことで「記憶を新たに」したり、市民の呼びかけで各地にホロコースト追悼記念碑が建てられたりしているのだ。統一ドイツでは学校に限らず、社会のさまざまな場において、それぞれの場にふさわしい記憶の伝え方を模索している (P.59) のを、著者は「記憶と記憶へのとりくみ」と呼んでいる。

第2章では、戦後ドイツの記憶と歴史認識の過去から現在へかけての変遷をたどる。50年代のドイツ人は戦争責任をナチスにおしつけ、自分たちの過去の責任には目をつぶったが、「68年運動」と呼ばれる学生運動をきっかけに、戦後生まれの若者がナチスだけでなく、親の世代の責任も追及するようになった。その流れが70年代にブランドの「新東方政策」につながり、戦争責任追及が政治化されることになる。

第3章は、何年前かに日本のテレビでも紹介された、ポーランドとの教科書対話を中心にしている。かつての敵対者や長年の宿敵と記憶を共有するために (P.97)、第二次大戦後から西ドイツとポーランドが長年にわたって地道な努力を積み重ね、幾多の障害を乗り越えて、「対話を通じて、対立する<記憶>を一歩一歩、歩み寄せた」経緯が詳しく述べられている。

教科書対話が、西ドイツ・フランス間では1950年代に始まり、比較的順調に展開したのに対し、対ポーランドのそれは茨の長い道を歩むことになった。やはり、「侵攻した国とされた国」の間にはそれだけ激しい敵対心があったのだ。それにもかかわらず、不可能を可能にしたのは、その時々の方面における気運・多くの歴史家の協力・世論だったという。

また、1976年の教科書勧告がドイツ全11州に受け入れられるまで10年もかかり、SPD（ドイツ社会民主党）とCSU（ドイツ・キリスト教民主同盟）のどちらが強いかによって、その進度も異なっ

たという。保守的なキリスト教民主同盟が強い州では、受け入れるのに時間がかかったのだ。地方分権のドイツの特徴がこの面でも鮮明に浮かび上がり、興味深い。(後述するように、その保守政権が、東京電力福島第一原子力発電所事故の直後に、世界で真っ先に「脱原発」を決定したのは、驚くべき英断であった。)

「暴力のスパイラル」という既成語に対して、「**歩み寄りのスパイラル**」を唱えたのは、ブラウンシュヴァイクにあるゲオルグ・エッカート国際教科書研究所のマイアー氏であり、研究所は「対話を通じて**共通の記憶**を育み、**記憶を共有する**努力を続けてきた。そして、これからも未来に向けて**記憶をめぐる新たな対話**を続けていく」(P.131)。この研究所は、世界中の歴史・地理・公民の教科書と関連図書を24万冊(世界最大)蔵する歴史図書館と研究施設から成っている。登録手続きさえすれば誰でも利用でき、ほとんどの図書が開架式でならべられているという、文字通り開かれたそのあり方も感銘深い。

なお、共通教科書では、「従来通用してきた歴史理解や『**記憶の型**』の変化」についても説明することが指示されているという。「研究所は目下、時代の要請に合わせてさまざまなテーマを掲げている。(中略)戦争と対になった狭義の平和に限らず、**平和をより総合的な文化としてとらえている**」(平和の文化)(P.129)。

2009年には、「ユーロクリオ(ヨーロッパ歴史教育協会)」が企画した、インターネット上でマルチメディアを使ったヴァーチャル教科書構想『**Historiana 過去への入口**』が始まり、改めてヨーロッパの文化と情報を世界へ発信する、歴史の多様な教材がいつでも利用できるようになるそうだ。

最終章は、「**ヒロシマの記憶を人間全体の記憶に**」を標語にして、ドイツ市民がヒロシマの記憶の線上に「**フクシマ**」の記憶をのせて、真っ先に「脱原発」を宣言したことからはじまる。(原爆の直接被害者であるわが国が、経済の停滞をなによりも恐れて、「脱原発」に踏み切れないでいるというのに。)  
「記憶をそれに直接かかわった集団や社会の枠から解き放ち、人間全体の記憶へと高めていく。(中略)ドイツの市民は『ヒロシマの記憶』について、『ホロコーストの記憶』と同様にその**記憶の文化**を高め、**人類が共有する普遍的な記憶**とみなそうとしているのだろう。」(P.139)

本章では、2011年に兵役が廃止されたことの功罪も述べている。長崎原爆資料館で奉仕活動をしたドイツ青年の例を挙げながら、このような社会奉仕役や良心的兵役拒否の機会も廃止されて本当に良かったのか、を問いかけている。評者も、「兵役に従うか拒否するかを選択は、一生に一度は国家と自分について真剣に考えるチャンスであった」と言うドイツ人の声を聞いたことが何度かある。

更に、兵役廃止によりドイツ連邦軍が少数精鋭の部隊をつくり、「**集団安全保障**」や「**国際貢献**」の名のもとに、「**グローバル化した『人類全体の記憶』**を政治に利用した」(P.147)ことをきびしく批判している。

また、ドイツがアメリカ、ロシアに次ぐ世界第3位の武器輸出国であり、「**軍需産業メーカー**が、地元の教育活動や文化活動を積極的に経済支援している。**戦争の記憶を保持**し、平和を願って**記憶を未来に伝えていく**追悼記念施設の維持などもその支援を受けて」(P.148)いるという、ドイツの抱える大きな矛盾を指摘しているのには、はっと胸をつかれる。

ここからは、「多文化主義 vs 移民の統合」という切り口で、ドイツの現在から未来への展望が述べられる。最近、メルケル首相をはじめとする多くの政治家が、単なる多文化主義は、多民族分裂国家を導く恐れがあるとしている。ドイツは移民国家ではなく、「あくまでドイツの社会や文化が基本となり、そこに移民を受け入れ、統合させるというのが国の基本姿勢である」と (P.157)。

2010年にバーデン・ビュルテンベルク州の小さな町パート・ザウルガウのレアールシューレ (中等実科学校) で実施されたプロジェクト『故郷』は、多くの移民の背景をもつ生徒の発表会で、「それぞれが**自分の記憶を大切にしながら**、ドイツに住む**市民として共通の記憶**や価値観を育もう」 (P.157) とした努力をアピールするものだった。

加えて、同州では、2011年に緑の党の代表を首相にした新政府が発足し、新しく「移民統合省」が生まれ、その大臣になったのはドイツ国籍をもつトルコ系市民であることが、「ドイツ社会において**ドイツ人と移民が共有する記憶**」を育む「**未来の記憶の先取り**」 (P.166) という文脈で語られている。

いよいよ本書のしめくりとして、「移民の統合、ヨーロッパの統合、そしてドイツ統一をめぐる東ドイツの統合」の「三つの統合への課題」が論じられる。「**それぞれの場の記憶**は当然その内容も深さも、記憶を担う人びとも異なっているが、**個々の記憶が集まって集団の記憶、社会の記憶として文化を形成している**。(中略) 記憶がもっと多くの人を動かし、世の中を動かすためには、その記憶を**集団の記憶、社会の記憶、国民の記憶**として大きな**記憶の文化**に育んでいかねばならない」 (PP.171-172) と、著者は強く訴えている。

ドイツの歴史教育で最も重視される、批判的に物事をながめる、という姿勢が日本人には見られないことにも当然言及していて、「伝統的な文化、慣習により、(中略) <世間> や <周り> から心理的な抑圧や制約を受け、本心を自分の意見として自由に表現しづらいことが多い」 (P.181) と説明する。

評者は、これに加えて、「日本人の忘れっぽさ、楽観主義、お互いに依存しすぎて、責任の所在がわからない不透明さ」も挙げたいと思う。この本が手元に届いたのは、日本の終戦記念日の前後だった。2012年8月15日夜に放映された特別番組『NHKスペシャル 終戦なぜ早く決められなかったのか』 (NHK総合テレビ) は、戦争終結の機会を逃した指導者たちを取り上げていて、衝撃的だったが、『朝日新聞』には、6日後に、たった一人の視聴者からの感想だけが載せられていた (2012年8月21日朝刊『はがき通信』)。

その間、第1-3面を飾っていたのは、尖閣・竹島の領土問題であり、戦争末期に60万人にも犠牲者を出した責任の所在を問う記事は、一切なかった。どうして、我々は (評者自身も含めて) ドイツ人のように過去と真剣に向き合えないのだろうか？

今こそ隣人と辛抱強く対話を重ね、**共通の記憶**を育み、**記憶を共有する努力**をしなければならない。忘却に逃げるのではなく、**忘却に抵抗**するのだ。日本の歴史教科書における第二次大戦に関する記述について、毎年のように中国・韓国から抗議が寄せられるのは、なぜなのか。中国、韓国がそれぞれの国家としての思惑から日本を悪者に行っているから、というのも間違いではないだろう。

また、本書が指摘しているように、ドイツでは現場の教師が教科書採用の際に内容をチェックできるようになっていて、日本のような教科書検定がないという、教科書と国家の関係も詳しく知る必要

がある。

日本と韓国、そして日本と中国の歴史学者が共同研究して、それぞれ共通の教科書を編纂する試みもあるのだが、その努力が報われないのは、なぜなのか。国家の思惑だけではないように思われる。

なによりも、けっして忘れてはならないことを我々一人一人が忘れてしまいがちであることも大きく影響しているのではないか。戦争責任について、日本の世論の声は小さすぎるとも言える。それは、日本の歴史教育（20世紀以降についての）が十分ではないことから来ていると、だれでも感じているのではないだろうか。

最後に、本書の記述でもの足りなく感じる点を挙げたい。多くの人が疑問に思っていること、「ナチス党に投票した 3,900 万人のドイツ人は黙ったまま」「どこを調べてもナチス黨員（熱狂的ナチ支持者）の推定数は出て来ない。タブーなのだと思う」に反論できるだけの材料がこの本にも見当たらないのだ。

わずかに、前述した『ゲルダの沈黙』の著者が、この本を書く過程で祖父がナチスの協力者だったことが判明した、と語っているだけである。ドイツ国家としての戦争責任はあくまでも追及するが、ナチスに加担した個人の責任追及は、68年世代で終わってしまった、としている印象さえ受ける。

そして、現代のドイツの若者が戦争犯罪の記憶を受け継ぎ、後世に伝えて行くことに責任は感じて、自分個人には過去の責任をとる必要はない、と考える傾向についても筆者は明記している。

評者は70年代から90年代にかけての16年間をドイツで過ごしたが、歴史教育をたたきこまれすぎて、「自分はドイツ人だと胸をはって言えない」などというドイツ人に驚かされたものだ。しかし、ドイツ全体としての過去を悔いる言葉は繰り返し聞かれても、具体的に「・・・さんのお父さん（お祖父さん）はナチスだった」という言及を耳にすることはなかった。

それを明らかにすると、戦後のドイツ人は生きてはいけなかったのだろう。「忘却に抵抗するドイツ」と言っても、その「忘却」には個人名は含まれないのだ。りっぱな主義主張をかかげても、自己矛盾から逃れられないのは、人間の哀しい性なのか。

ドイツ現代史とドイツ人について知る入門書として、本書はとても読みやすく、学生にもすすめられる。特に、ホロコーストの凄惨すら知らず、「ヒトラーやナチに興味があるので、第二外国語にドイツ語を選んだ」などという学生には、ぜひ飲ませたい良薬のような本である。（2012年 大月書店）

Book Review  
“Germany in Resistance to Oblivion — culture of  
remembrance in Germany”

By Hiroto Oka

Taeko Nasu

Abstract

The author has been living in Germany since 1989 doing research and education of German history.

His main object was to grasp the present state of the education of German history in Germany as it is studied in research institutions, taught and told in schools and various other occasions. He did as much fieldwork and interviews as possible in Germany in order to convey his findings to Japanese readers.

He explains his logical structure in terms of his key word, “memory”, and he studied the essence and changes of historical awareness in Germany and in other parts of Europe so as to compare them with those in Japan.

He hopes that the result of his research invites reflection on the issue “for what one tries to remember”, and his goal is effectively obtained.

The Germans have been teaching themselves their recent history; one example being the collaboration of German and Polish historians to arrive at their joint history textbook. Could this lead Japanese and Asian historians to collaborate in a similar fashion?

This book reminds us of our own tendency to slip into oblivion. How many of us try sincerely not to forget the Japanese modern and contemporary history? (2012, Otsuki-Shoten)